

## SICE-DIA ロールモデル記事シリーズ

「これまでの選択に後悔はない」 世界一の地球シミュレータに携わった女性研究者の生き方（高橋桂子先生（後編））



女性研究者として、どのような道を歩んできたのか。その過程で生じる悩みや迷いを、どのように乗り越えてきたのか――。女性研究者の先輩に、キャリアストーリーと考え方を伺う本企画。

今回は **SICE2023** 年度会長であり、長年、国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）で地球シミュレータプロジェクトに携わってこられた高橋桂子先生に伺います。

後編では、「これまでの選択に後悔はない」と話す高橋先生に、研究職としてのキャリアに留まらず、ライフも含めた考え方、生き方をお話いただきました。

インタビュー日： 2024 年 11 月 6 日 於：早稲田大学 早稲田キャンパス内某所

インタビュアー： 北森 悦（ライター・キャリアコンサルタント）※

（※ 北森俊行先生（東京大学名誉教授、SICE 第 33 期会長）のお孫様）

オブザーバ： 鈴木高宏（麗澤大学、SICE-DIA メンバー）

田中ひろみ（SICE 事務局）

## 【プロフィール】

高橋 桂子

早稲田大学総合研究機構グローバル科学知融合研究所上級研究員・研究院教授／NTT 宇宙環境エネルギー研究所リサーチプロフェッサ

津田塾大学学芸学部数学科卒業。1991 年、東京工業大学大学院総合理工学研究科システム科学専攻博士後期課程修了、工学博士。花王株式会社文理科学研究所、ケンブリッジ大学 Computer Laboratory Visiting Scholar、東京工業大学大学院総合理工学研究科 準客員研究員を経て、1998 年、宇宙開発事業団（現 独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA））招聘研究員。2002 年より、海洋科学技術センター（現 国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC））地球シミュレータセンター研究員、グループリーダー、プログラムディレクターを務め、2014 年に地球情報基盤センター長就任。経営管理審議役、横浜研究所長を経て、2021 年 4 月より現職。

これまでの経験をまとめ、若い世代に伝えていく

——2021 年からは国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）を離れ、早稲田大学総合研究機構グローバル科学知融合研究所／NTT 宇宙環境エネルギー研究所に移られました。現在はどういうようなことに取り組まれているのですか？

1 つは静岡県の子供さんなどと、地域の海の産業の掘り起こしをお手伝いしています。

現在、あらゆる分野で DX が叫ばれていますが、自然を対象にしたような第一次産業や都市インフラを含めた都市計画といった分野では、DX を進めるための「D＝Data」がなかったり、あったとしても、ただ観測しただけで終わってしまったりしていることが非常に多いんです。そのため、DX を進めるには、まずデータ作りから始める必要があります。つまり計測して、計測の結果と結果の間をシミュレーションで埋め、そうして出てきたデータをどのように活かせるのかを提案していく。そんな仕事をしています。

あとは 5 年ほどを目標に、やりっぱなしにしてきたことがたくさんあるので、それらをまとめていきたいと思っています。これまで、すぐに陳腐になってしまうのは嫌だったので、20～30 年先まで生き残れるシミュレーションモデルを設計してきました。それらをもう少し取りまとめることで、後の世代に残せるよう尽力したいと考えています。

同時に、若い人たちに向けて、問題設定のための目利きといいますか、その辺りのノウハウのようなものを伝える努力をしなければいけないとも思っています。これまでに、あまり上手く回答が得られない可能性の高い問題に、一生懸命、力を尽くしている若い人たちを何名か見てきました。もちろん、そこに取り組むことで突破口が開けることもあるとは思いますが、その前段階として問題設定の仕方がとても重要です。これはノウハウとして伝えられるものではないかもしれませんが、何らかの形でお伝えしていきたいと考えています。

責任を持って自ら選択してきたからこそ、後悔はない

——前編で、30代は模索しながら自らの生き甲斐や楽しさを探し続けてきた結果、研究職としてのキャリアを積んできたとお話されていました。ライフの部分では、悩みや迷いはありませんでしたか？

常に迷ってきましたよ。ただ1つだけ言えることは、どのような選択をするにしても、自分で責任を持つこと。親や社会など、誰かのせいにしないことは、とても大事なことのように入います。パートナーがいる方ならパートナーとよく話し合って考え、自分たちで選択し、自分たちでその選択に責任を持つ。

特に女性の場合は、生物学的に子どもを産める年齢にタイムリミットがあり、これにはどうしても抗えません。非常にナイーブな話ではありますが、考えることを避けては通れないと思うので、パートナーと共に話し合い、考え、選択する必要があるとは思入ます。

ですが、いずれにしても自分の人生をどう生きていくかに正解はないので、「こうしなければならぬ」というのはありません。だからこそ、自分がどう生きたいのかをよく考えて選択し、その選択に自分で責任を持てばいいと思入ます。

このことは、キャリアにおいても同じことが言えます。それこそ私は、大学進学時に数学科を選びましたが、大学院では工学系の研究室へ行き、分野を変えて地球シミュレータプロジェクトに携わってきました。地方大学のポジションをいくつか提案いただいたこともありましたが、地方には行きたくないと思ってお断りしてきました。

色々と模索しながら、結果的に研究職としてのキャリアを歩んできましたが、自分が好きだと思えるかどうかを判断基準に、全て自分で選択してきました。ですから、キャリアにおいてもライフにおいても、全く後悔はありません。そう考えると、やはり自分で選択し責任を持って人生を歩むことは、とても大切なことかもしれませんね。

「できないことは、1つもない」

——昨今、若い世代には安定志向が強いと言われることがあります。研究職としてのキャリアを積んでいくにあたり、安定志向はどのように〜？

確かに安定したい、落ち着きたいと考えている方は入ますよね。ですが、落ち着く環境は本当に存在するのでしょうか——。私は、安定する場所、落ち着ける場所はたぶんないと思入ています。

ここなら落ち着けるという環境が見つかったとしても、周りの環境が変わってしまったら落ち着けなくなるかもしれませんよね。今の時代、外的環境はどんどん変化しますし、それこそ自分自身も刻一刻と変化しているはずですよ。

ですから、不安定さについて深刻に考えすぎない方がいいかもしれません。研究職とは、常に問題を見つけて定義し、結果が出るまでの一連のことを自分の中で設計し、人と相互作用しながら仕事を進めていきます。それが分かるようになってから、私はとても研究職が楽しくなりました。自分の身の置き場についても、自分と環境が相互作用する中で、平衡状態のようなある一定の状態にいられる方がいいのではないかと思いますね。

それに、安定していなくても、案外なんとかなるものです。私の中で1つの支えになっていたのは、上司の「できないことは、1つもないんですよ」という言葉。何度も言われてきましたね。

できないことはないとは、裏を返せばどうにかしたらできるということ。どうにかする方法を考える方がずっと生産的ですし、ポジティブですよ。それに、できないことを証明するのは難しい。反対に、どうにかしたらできる可能性の方がずっと高いと思います。ですから、安定を求めるよりも、たとえ不安定さを感じていても、その中で何とかする工夫をしていった方がいいように思います。

――安定を追い求めるより、不安定さの中で、なんとかする方法を考える。

本当は0か1かに割り切りたいかもしれませんが、なかなかそうはいかないものです。そのため、分からないことを引きずりながら探索することは大事かもしれないですね。そんな心持ちになれるといいですね。

高橋先生、貴重なお話をありがとうございました。

(終わり)

[SICE-DIA のページに戻る](#)